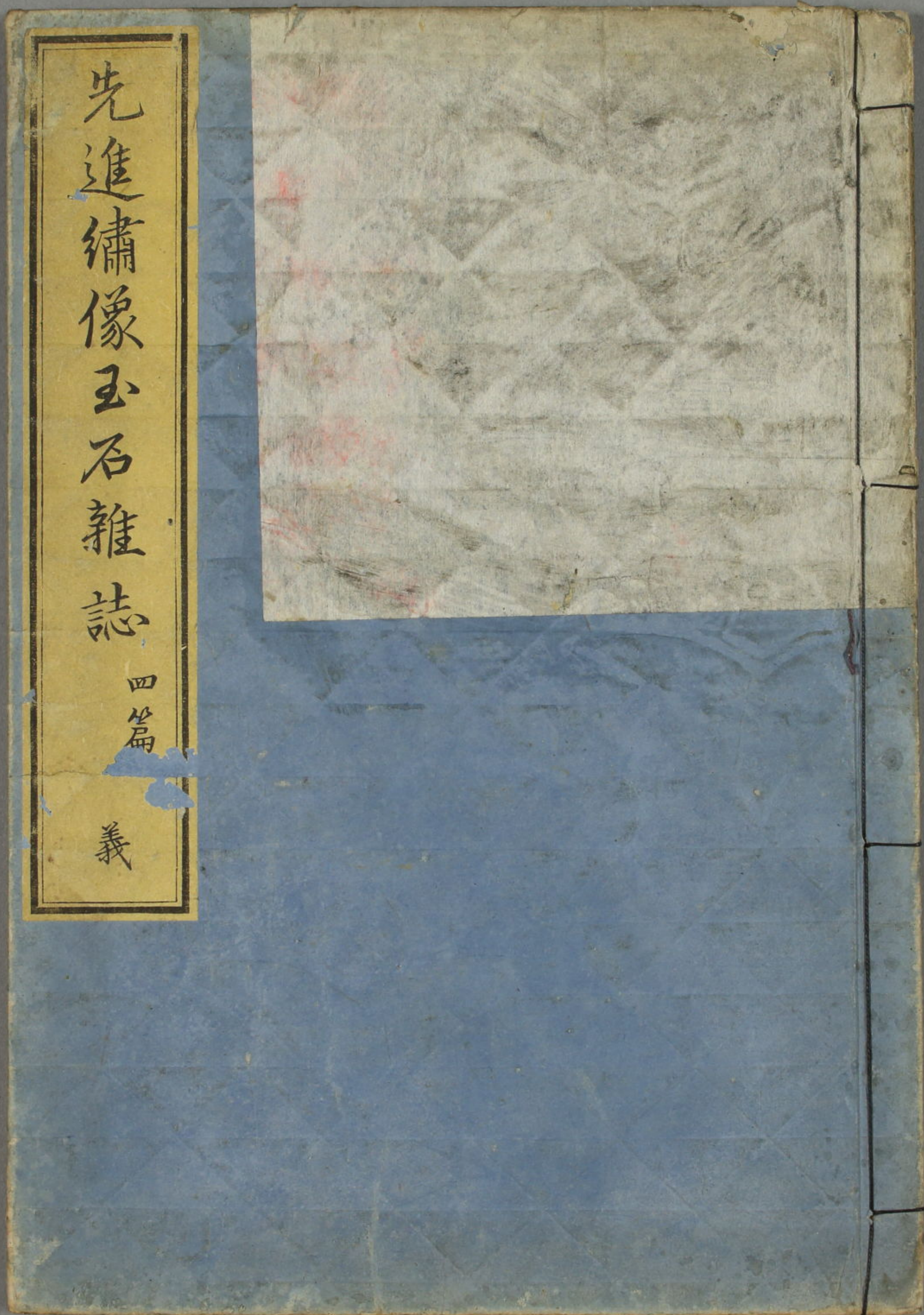
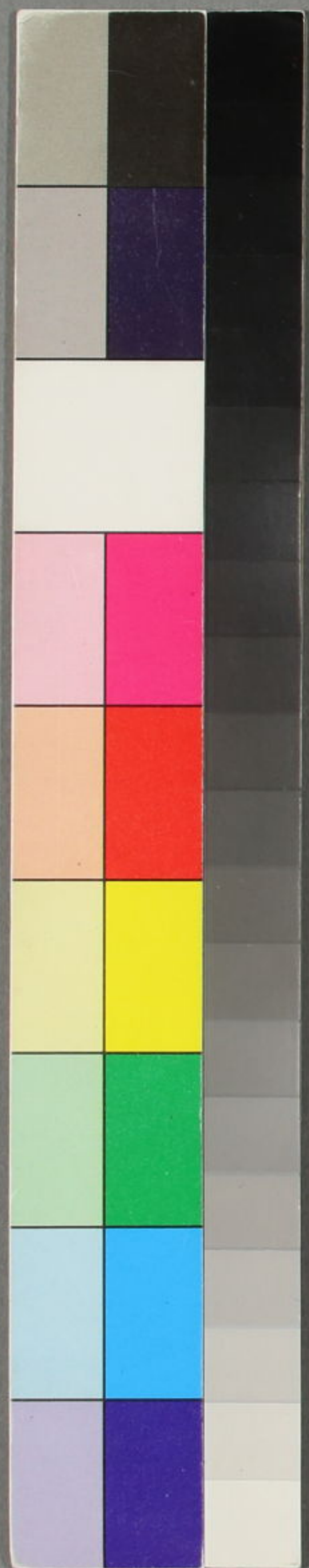


先進繡像玉石雜誌

四篇

義



河合氏藏書

真田幸隆の碓氷嶺乃謀畧を為任せ晴信朝臣了暇を  
請岩尾城了歸り熟々と合戦の様を案し甲列勢乃剛臆  
より備死乃体ましく納得し再度村上義清を脅るを  
策を思得し同年十一月三日幸隆は居城へ板垣駿河守  
信方飯沼兵部少輔鹿島小凸回備中吉昌辰三人を招後  
志く響應種々乃上幸隆申より飯沼飯内小凸田  
原小室子左城みく時々桑倉中世及某ら心腹也小大  
形知食へし板垣飯内親しく見参せし上由候に飯子  
碓氷嶺合勝乃後屢對面給たり殊に多年乃交遊より  
心易く覺る出持候ふ也其れ親しく某ら思慮せし上を隱  
まひ中ふ以代頃出くく以る村上義清越後國へ使を

晴信朝臣了暇  
了暇  
了暇

立て長尾と和睦し越後勢を引出し西旗を以て小縣佐  
久二郡を切返し終る甲利より山籠入んと申通し以  
由たぐし村より所領越後乃國頭城魚沼二郡を散在し  
る三四十箇處に有けしは是を村上累代乃本領お里と  
承て公然を近來長尾の押領せらるるはよ王義清  
と長尾と多年矛盾し弓箭を取合はしむと申佐久小  
縣乃二郡の眼前乃恥辱お里と思ふか故に是を交易し  
和睦せんを計るへし長尾を二類多き者お若義清  
と一味同心せば由る補大事おらん幸隆一策仕りし  
はるやと存しむと何由村上押乃為し御在城おるに  
間し振る以て云信方向く真田致乃良策兼く承て里

及ひて以て定めし神妙不測おるはる形也其少くも墨を  
取らるる後學了仕らるやと云幸隆答く左に小を以て  
大を破る裏を以て殺し克し軍法乃秘し其用捨乃  
際毫髪を漏しやと申し余の御存乃よおるは申及  
て以て傳承おる武田乃御家子飯田河原合戦と申すの以て  
是の萩原常陸介昌隆六十歳許の時より形虎朝臣  
廿七八歳乃時と申す時常陸介會園乃小旗と云物を他  
日二子餘の勢おる敵の福島正信介駿遠く名を得し勇  
士然し一萬餘乃勢を以て其来しを以て一時に攻破し  
て以て承る會園乃小旗と申す奇兵乃術あり即武略と  
申者ふの奇と申せば偶乃及る復て為かす事在中

ふひへハ後め斯々との中難きかと云ハ飯富兵部リ云  
其萩原ハ某ハ姨丈みく十二年以前九月十三日ハ没故  
志くハ文形からぬ武邊紹畧乃者みくハ會圖乃小旗  
乃ハ御承也傳大ふとみく習ハ得ハ一ハ以ハ真田敏  
ハ御相傳ハハ聞ハ能次ハ學ハ以ハ了ハ御指南頼  
ハ云幸隆然御同柄とハ不存也と致ハ了ハ中知  
赤面乃至ハ思意乃及ハ程ハ方便ハ廻ハ以ハ御承也  
密談數刻乃後ハ將何ハ退散ハ致幸隆乃胸中ハ憑  
き考ハ思ハハ

真田幸隆會圖乃小旗乃傳書一卷也其文長く一  
爰ハ登載ハ睦ハ僅ハ其畧ハ左ハ鈔撮ハ一乃先手七

組二乃先手七組服備六組旗本六組後備三組遊兵  
組小荷駄二備總七組以ハ北斗乃七星ハ象星建隆  
滿平定執破危成收閑閑乃七字ハ以ハ懸引ハ會圖ハ  
ハ云と云ハ是萩原常陸介ハ真田幸隆ハ傳ハ昌幸  
隆ハ真田安房ハ昌幸ハ傳ハ昌幸ハ傳ハ真田左衛  
門佐幸村ハ傳ハ幸村ハ傳ハ大坂ハ閑ハ七組乃平  
を成ハハ

海野謙代乃郎等職ハ須野原若狭也同舍弟總左衛門  
云兄弟の者也其武勇等倫ハ超才智尋常ハ睦ハけ也ハ  
幸隆ハ股肱身目乃如ハ頼ハ機密ハ中ハ會ハ植科那葛尾  
ハ遣ハ村上義晴ハ云セハ我等兄弟ハ海野代

代家老分乃者ふくひり幸隆更ふ芳心如く岩尾小歸里  
徑一本領知取かあく由安堵せしよ及舊臣等よ由吏こ  
所領を分配を履きよ其事如く結句謀如く身を政易を  
履き由承てり以への坐辱殺せらるんを由は惜く樹影  
を頼る氣を以て云入一か及義清急を對面しよ面を  
海野乃柱石と称へる舊家おふり立退色し様お覺心泊  
ぬ是の義清の寐育搔んとくの謀おあへしと云兄弟の  
者答けふは莫々左様乃事いよくと世言あくやせし時  
義清然の真面目居城岩尾へ我人數を引入以へ幸意の  
如く岩尾を乗取形の本領より一俵乃加増有へる中熊壯  
午王ふ起復文志く取交し薬師寺右近を清二清燈六郎

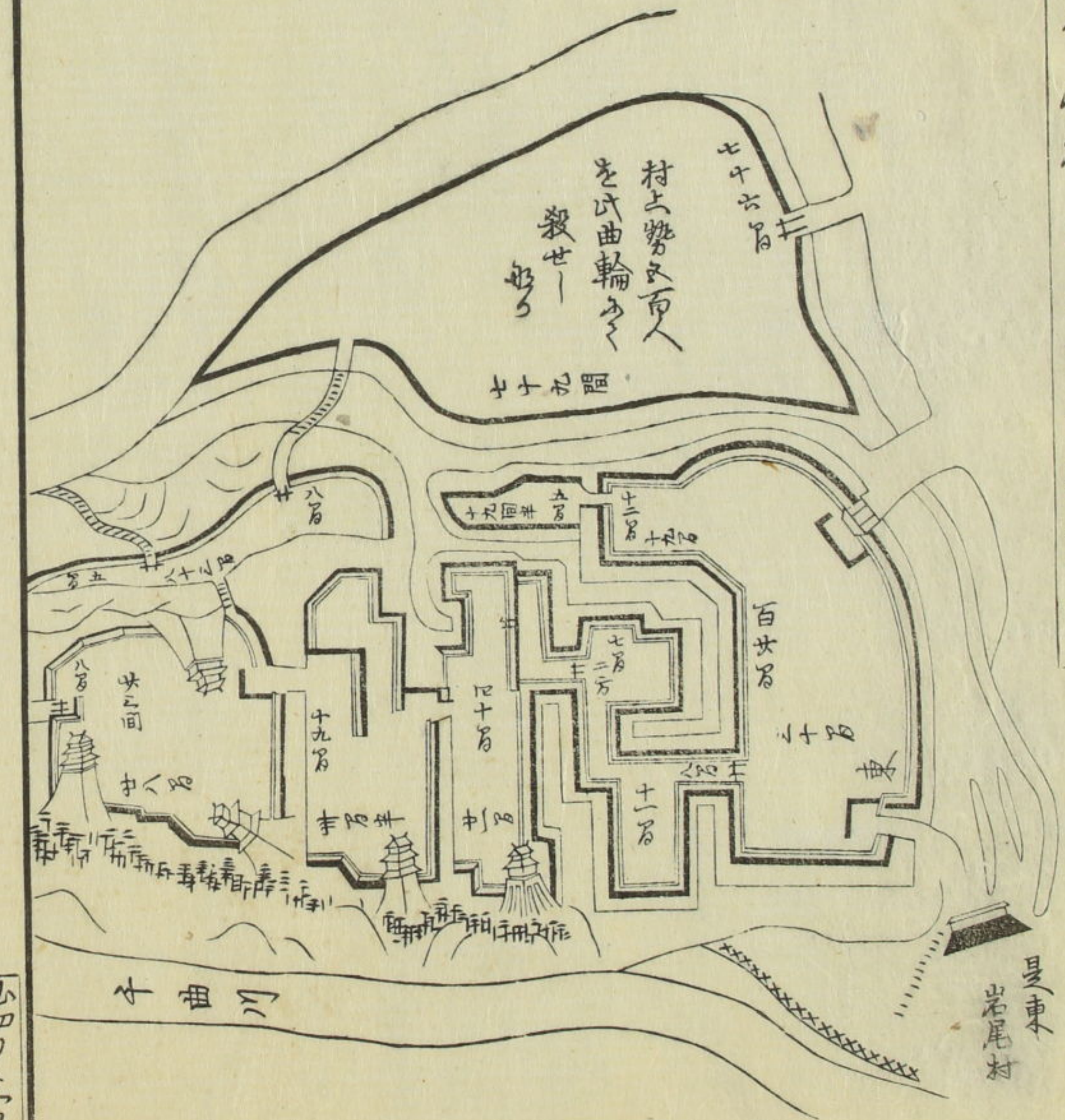
五十四之三

次郎を始め究竟乃勇士又百人勝りおして兄弟お付く  
岩尾城を奪取しよ由須野原兄弟の村上を方便せよ  
又百人乃勇士と共に岩尾乃里ふ至り竊に城中へ斯と  
通し夕色及幸隆下知悉く二曲輪へ引入た日又百人乃  
者共々不知業内乃し形ふり故に計策との爰に由志く  
以須野原兄弟お誘引せし進引おとふと云曲輪乃堀の  
よよ里鉄炮を六十挺連發し發しけし由村上勢方便也  
よりよと始り覺也とよ為方おく一處お集り的小成く  
勢打也りり艦く名字乃知し限を擇み出一箭を甲着ふ  
送るしかは晴信朝臣能由せしとて感状を出せし由是  
爾後幸隆上田筋乃北時田乃東乃岨連形を願岸寺右

馬助雅方布下新左衛門尉雅朝依路右近進等を攻落し  
盤を小如何形を計畧を為す一と肝膽を摧きけり  
急夜思案しけり及板垣信方を勇あらし謀少し頼岸寺  
氣猛く志く明智あり是と闘を免は西雄必傷く一  
我中其間不就く為をある一と決定し即甲府へ  
け三人の形勢を夜を以果し一板垣駿河守信方を大将  
と一々浅利式部正信音と原美濃を虎窟とを差副ら  
けり案小違し以板垣より斥候乃六十騎と頼岸寺乃二百  
餘騎と鐘を合せし戦ひけり及板垣勢ハ馬上あり後若  
きけり及面々得道具了事頼岸寺の逸を過く長追し  
原虎窟より迎備り突崩れ合はる廿七騎ハ討死に其間

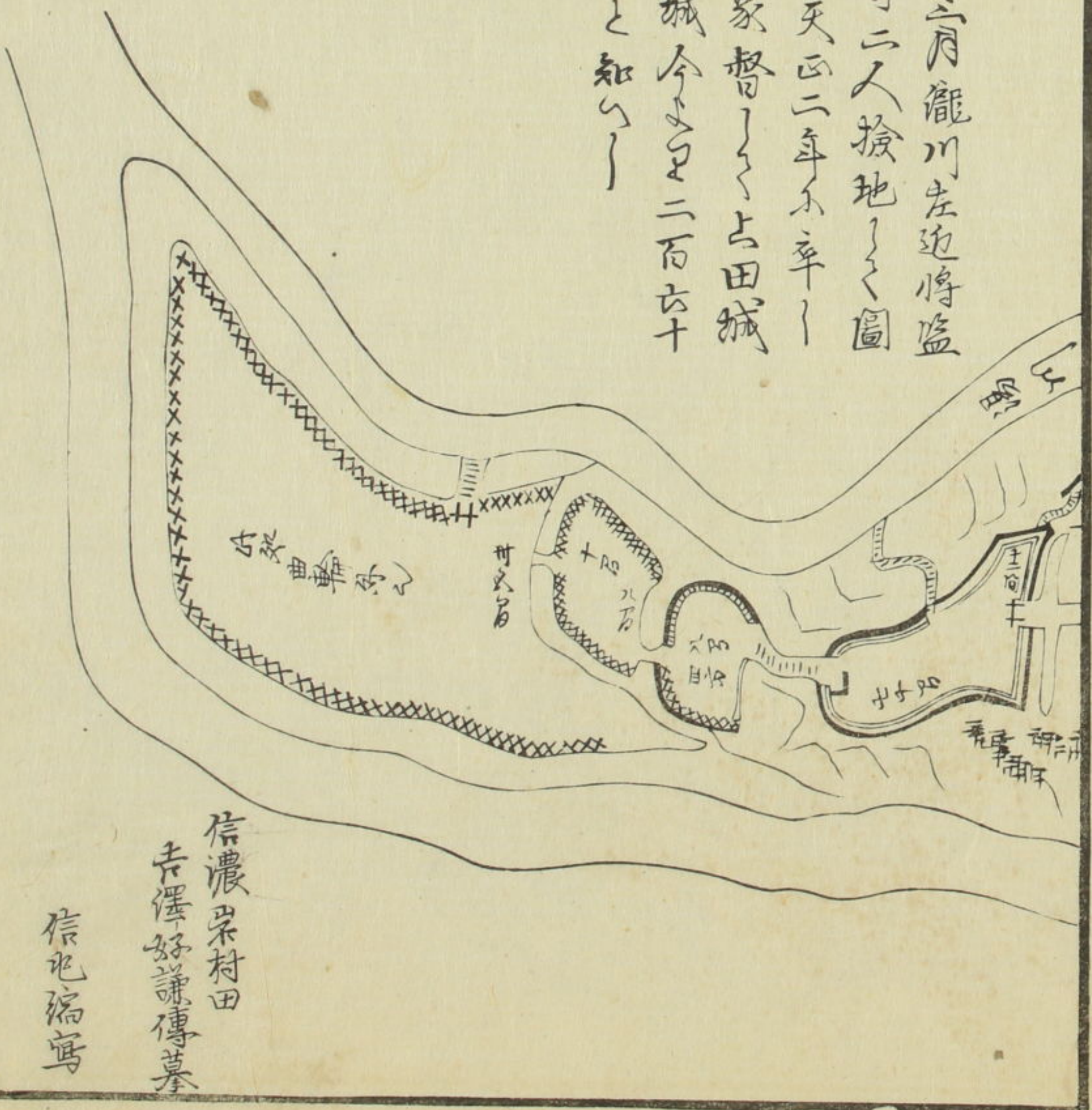
子板垣頼岸寺相引り勢を引上り形然共頼岸寺頼  
切たふ廿七騎を討せし心樂し以甲府と合体志く子孫  
乃業を計らるやと思入意起り城に引移り旗色を見  
るぞ居たはけり斯り一後を浦野乃城に民部丞幸次  
村上與力乃志を變り内山乃飯富兵部少輔を許り内々  
中通し味方小参るを由を江を以是併幸隆を勧誘  
乃力小よ移りしと板垣飯富小山田乃諸大將を始め真  
田の智謀を計り難くぞ思ふ是時佐久小縣乃郡縣既  
子甲陽外歸服せしと佐久郡志賀乃笠原新三郎一人上  
板家へ一味し再度上列勢を引出り内山岩尾の西城  
を襲ひ取んとを謀る幸隆方しつり開出り即甲府へ

信濃國佐久郡岩尾村古城圖



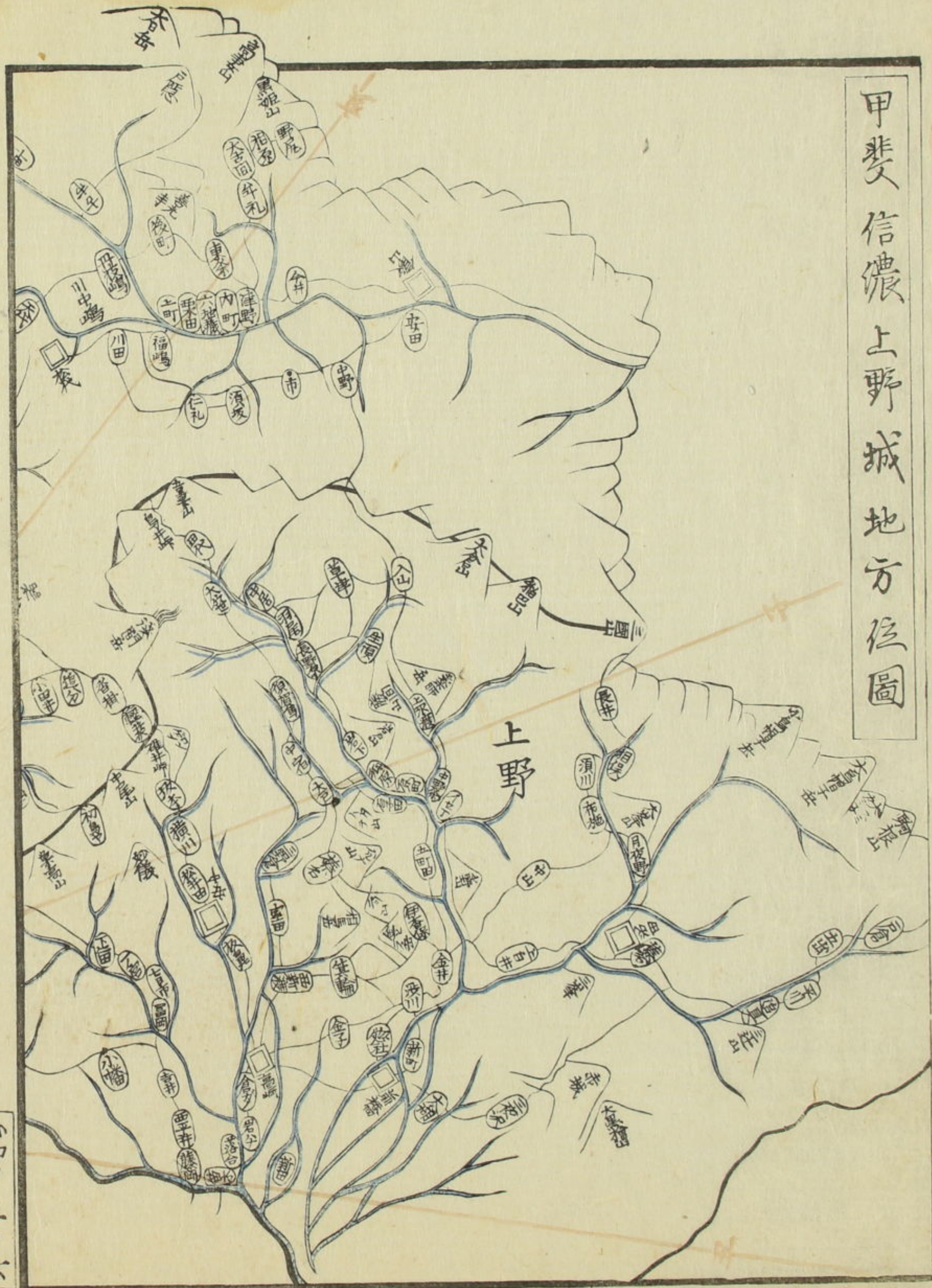
四ノ六ノ五

此城圖天正十年六月瀧川左邊將監  
一益森勝頼長可二人檢地之圖  
世々如右ノ章隆天正二年不辛一  
昌幸天正二年家督一占田城  
入任以熟達ハ此城今ノ二二百六十  
尺年前ノ形象と知レ

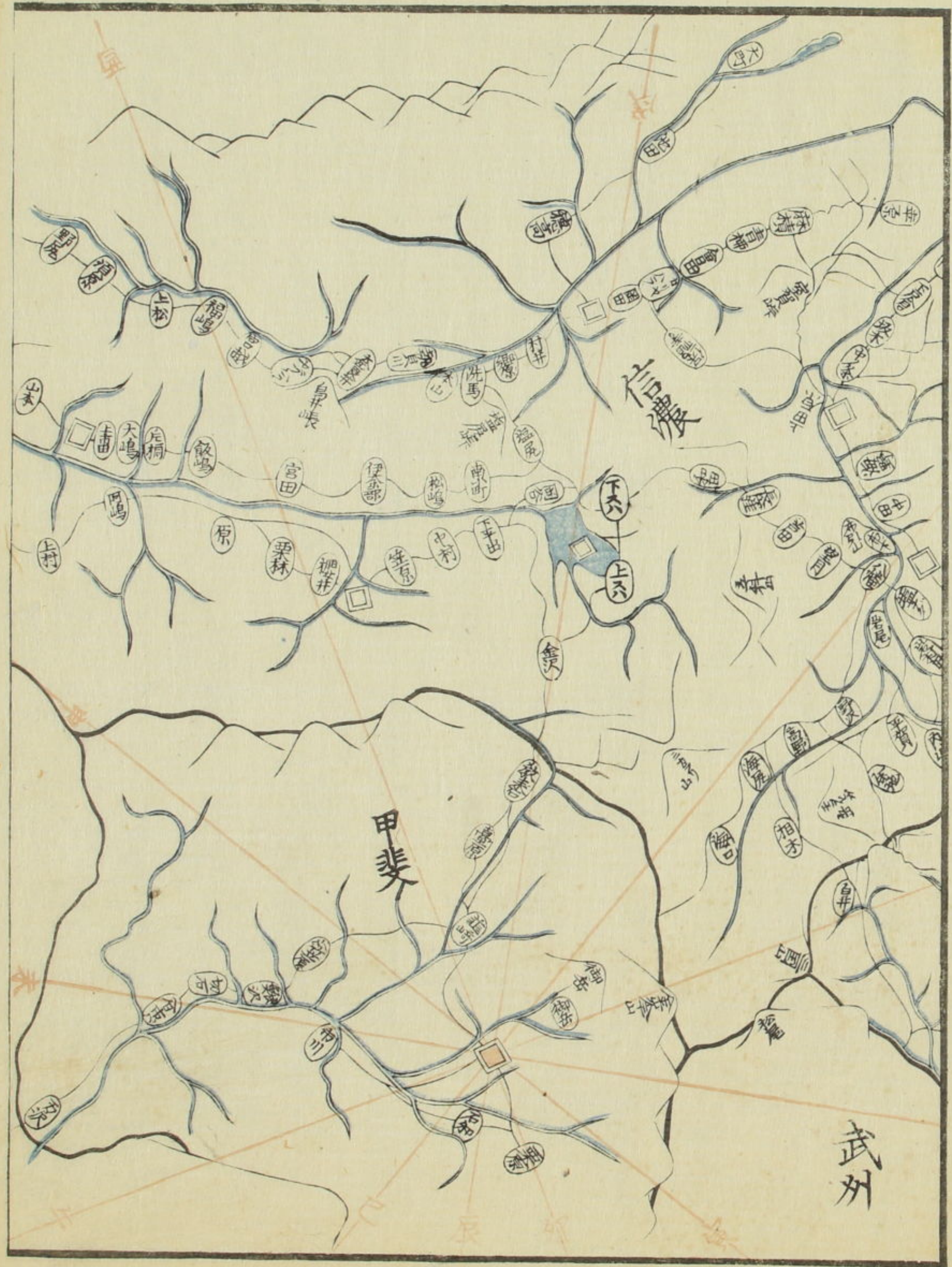


信濃采村田  
吉澤好謙傳摹  
信也編寫

甲斐信濃上野城地方位圖



五十四ノ二ノ六





注進以晴信朝臣を突然に斬りて、天文十六年八月二日夜上刻甲府を襲ひ、同六日笠原新三郎昌朝、信列佐久郡志賀城へ押寄、同十一日未刻子城を攻落し、笠原の首を以て萩原孫右衛門あを付取、晴信朝臣年来乃遺恨を晴し、凱陣ある處に催さしめ、けふ處へ幸隆中宮が御馬を穿らせ、頃日新冬乃諸士、對面給し、里砂原峠通上、田原を御一覽、以て村上方乃城持と、わの膽を寒し、滋味方子志を運入、老多く成以へ、一旦義清乃動靜を以探らせ、給ひ戦とせ、あく勝術を旋ぎ、我をかくと、勸しかば、先宜ふへ、とて、人數を押し出さ、我孫子乃百戦百勝、の善乃善夫、不う、非以、我を

とて、人乃兵を屈せ、我善乃善夫、不者ありと云、子協へ、ふか果し、く村上義清、晴信朝臣乃上田原へ、打ち入、甲を突、頃日商家被管乃諸士、真田幸隆、以調、畧せら、も、甲列へ、味方せんと、企不、仲風、吹せ、しか、と、由、然、乃、その、こ、ゆ、有、ゆ、と、油、以、志、く、打、捨、置、し、去、我、悔、し、く、也、浦、登、願、岸、寺、な、と、由、定、め、く、兩、端、を、懷、き、以、ら、ん、今、夜、晴、信、不、敵、了、ゆ、我、領、知、進、く、打、お、し、能、く、義、清、を、見、侮、り、故、我、か、し、是、ゆ、真、田、め、く、下、墨、ふ、く、有、へ、く、也、は、義、清、一、人、身、た、り、と、由、晴、信、の、旗、本、へ、切、入、く、晴、信、と、自、身、乃、勝負、を、か、し、多、年、の、憤、を、散、さ、我、ら、左、殿、く、は、幸、隆、の、首、を、斬、り、又、百、人、乃、者、共、の、冥、福、を、備、へ、我、ら、以、て、二、刀、を、以、て、十、死、一、生、乃、軍、せ、ん、と、思、

定めたる命をと思はん人々其残り留ふへし廿四恨  
子思く一と牙を散く躍り上り怒けは小沼川舎人  
助を始め重代乃家人等七十餘人葛尾城を首途一神の  
道へ推かゝ筑摩川を涉り上り原へ馳向ふ晴信朝長は  
由を伺ふに然り手分をせよやく先板垣信方を先鋒  
とかく相備と申云ふ又百餘騎を六備に分ち二陣入は  
飯富兵部少輔虎昌小山田備中も同左兵衛尉武田左馬  
助信繁も同く六備入立たり其次は旗本六備左右  
乃殿備後備ふ馬場内を去り引下り原加賀守三  
百餘騎を扇乃手分候い備大里兩陣互に弓鉄砲を以  
て迫合殺す其あは頻く板垣り手よと曲淵勝左衛門二

科肥前守廣瀬御左衛門かと一着り鐘を入り突立也及  
村上乃陣より原田十郎左衛門八木宗七松野一齋馳合  
く火花を散く戦人と云共皆一知く討也乃曲淵  
三科廣瀬奮以戦く手を推き及申列勢潮乃湧  
く競掛り終り村上勢を切崩を義清か孫く思儲一とよ  
とくちと申騒り以二百餘騎乃兵士を左を三晴信朝  
長乃旗本へ云二無之了切掛り晴信朝長組んと血  
眼子成り躍り懸之窪田助之丞義清乃乗る馬乃平  
首を丁と突馬の突まき屏風を倒し如く伏々也は義  
清大まき以百と蒸鼻より鮮血流す如きは眼眩きて今  
ハ斯と見え如く村上勢十人又騎駈其里義清を馬よ介

乗世中子引包ん引退く幸隆色を見く是輕子村上  
乃馬印を持せく又七人引く江方へ走らせ森乃茂  
林乃陰ふ立をらせた是村上勢乃敗軍を二知不馳  
集まらせしと乃謀なり然しち幸隆ハ諸角豊後守  
昌清利武部直信音ハ勢を引率しち神乃道ハ押出  
葛尾乃路次を取切た是義清乃兵敗走ちるは乃行方を  
求めんとせ教子真田ハ偽兵不惑とせく爰彼と奔走  
せ教乃とみく更子義清ハ廻里合ち以義清殊無勢みく  
甲列勢子中と立らせ葛尾乃本道子掛ふを得以よ田  
原を北西ハ筑摩川乃西の方を猿ヶ馬場乃味乃下へ出  
葉原村より歸入んとせし爰路ハ浦野代方と真

田了誘た色く義清を遮り止めんと切知く子搔指さく  
待を志かば義清遂子葛尾へ歸ふへ路を拒かせ去市  
よ里水内郡乃深小路さく落ゆきり  
天文七年海野幸義村上義清乃為討死し彈正幸隆  
上田を去く上列子寄居し一本晴幸子駿列子相者  
晴信朝臣子遇く後子復讎乃素懐を遂村上義清を越  
後子走らしめ累代乃本領了歸ふ子至く十年を以  
漫子士卒を害せ以徒子殺庶を勞せ教不及び其功  
留侯不滅せ以云へし留侯張良仇を秦不報せんと  
あく兵を漢高祖不借く五世韓不相不恩く當不然  
小身不堅甲を被ら以手不利兵を握て敢し秦を滅し

禁を殲し天下乃民を安くし萬戸乃富を保し至る迄  
十七年及入幸隆子比ふ也及遲く至七年と云へし  
但留侯乃智と云共博浪沙に狙撃と云の克と能と云  
漢高祖と韓信とを待く而後志を得るも至る幸隆也  
不殆相似大奇計良策ありと云共真田も整むる際  
の是を施しへし便宜かき晴信朝臣と晴幸も遇て後  
智を放ち計を逞くか以てを得大英雄乃屈伸千古  
一致と云へし

義清乃兵士右往左往不敵亂し隊伍整をせりかは申  
別勢思のまゝ分捕し勝盛大ふ處へ幸隆走り來りて  
晴信朝臣了り中けふの村上一定越後へ落し長尾を渠

と覺え以今乃長尾の天文七年四月十一日越中國旗檀  
野あり討也大里し長尾六郎為景より四男あり父を討也  
志喚もそのあり九歳と同侍りし名を虎子代と申せ  
し形里一書小猿子代とあり但猿子代ハ十三歳乃時小  
元服し喜年次景虎と云其歳三月十三日沼田常陸介  
父子謀叛を起し景虎乃兄平義景康左平次景房二人を  
殺し景虎も危人か自りかす小島勘左衛門岸六助心を  
合せ二丸門番所乃板敷乃下へ隠し沼田より追手を欺き  
夜に入り林泉寺へ移しそれより椽尾乃常安寺へ落し  
本莊美作守を初とく舊功乃老兵を催促し天文十三  
年十月歳あり沼田常陸介と軍し是も打勝兒二人乃

怨を報し分國乃兵共の眼を覺し同十六年十七歳おて  
越中國へ切入女為景乃吊合戦志く弓矢乃勢を隣國へ  
示し譽を遠近に揚げ新者者也る今年十八歳お  
魚し士卒乃進退の緩急餘騎を中自中し引廻し天乃授  
る良將なり勝敗乃機を勘會し合戦乃圖を納得せは  
の容易く一味をへりくは善又村上と合伴せば是より  
度々折れて申列武士乃武者風を候とんと為へし搦  
内甲を見透せしは新様御計畧を承へくいと申せし  
かは晴信朝長いしく中議中けりと深く甘んばり  
信列乃諸士はよく持場々の用を嚴重に沙汰し付ら  
せし甲府へ凱陣せしりくは實に幸隆の策に中せし如く

義清越後了燕行長尾の居城頸城郡春日山子到り一向  
子頼よりを述志りは景虎對面し上田原乃合戦乃次  
第を尋ね然後お定めし聞中及も色以りし某の及の  
休越中か賀能登乃者共を斬りけりしを本意と為  
以への數年北國乃乃之お陣志く戦を挑み以り子頼思召  
と乃一言聞棄れし覺え以への甲信乃武士了意趣ハ  
おけしと申近き内水内植村乃際へ出陣し晴信とハ  
合戦志く新羅之郎以某取傳へしと云お軍法を試し  
へしと領掌以

武田家乃軍法乃山本晴幸お起也お由世人皆院と云  
共然らし新羅之郎より以降晴信朝長お及ましく廿七

皇朝軍法乃祖

天武天皇十二年十月丁亥日  
諸國不詔一々陣法を  
習せしむと日本書紀  
に見えり



天皇天文  
遁甲みくりくまじ  
ませしは書紀みまゆ  
まろくハ孤虚の法まろく由  
天皇の餘恩と云へ

大和國添下郡  
金剛山寺ハ  
天皇御陵あり  
御景あり今  
ありハ教寫  
せざる所と  
おもへ

近院右大臣 能南

甲斐源氏ハ相承せり  
軍禮軍法孤虚遁甲  
六壬 大一の式ハ公の

遺法なり



筆者  
廣貴  
と云

代相傳せし軍禮射禮あり是近院右大臣能育より桃  
園親王常陸太守へ傳せし遺訓ありとかや抑近院  
乃右府と中ハ文徳天皇乃皇子あり清和天皇乃  
庶兄あり其武藝を好みせ給ひ陳列乃法より馬  
乃習ひ戎具乃備城隍烽火乃制をく内外武官小職  
とせし典故軍團防衛乃考選悉く是を傳えしと  
形其武田家子傳を考ふふ皇朝乃軍法  
天照大神乃千箭六百箭の鞠を背負ひ後威乃高鞠  
を臂に著し彌振起し劍柄と握り素戔嗚尊を親ら  
迎防禦ありしけを始あり皇孫天津彦彦火瓊瓊  
杵尊の葦原中國乃邪神を撥平ありし經津主神と武

甕槌神を先遣とあり次了皇孫天降あり上中下  
三軍乃制と相同し神武天皇東征の時親諸皇子の  
舟師を帥ふ人と云ハ天皇親將とあらせむ人あり  
其後崇神天皇十年九月九日甲午大彦命を北陸に  
武渟川別を東海に吉備津彦を西道に丹波乃道主命  
を丹波に遣はし教を受さ教者あり及兵を擧ぐあり  
を成と詔乃らし將軍と為ふ人と云里是將軍の名を  
人良に授けらるし初形也但天子又兵と云ふ教は  
將軍の外也天皇親將乃一軍を置せしと教は又  
無仁天皇乃又年皇后乃母兄後穗彦王を擊せし  
時近縣卒を發し上毛野若遠祖八綱田を將軍とあり

也一の御 天皇親將乃軍を發し假了八綱回了授玉  
ひ一と内 仲哀天皇乃熊襲を征し入時中長  
鳥賊津連大之輪大友主君物部膳作連大伴武以連乃  
口大史後へ是も亦親將乃軍と五部あふと揚鳥  
神功皇后乃新羅を征し入時三軍と為玉ひ金鼓  
乃節と旌旗乃列を敷へ玉ひ荒魂乃先鋒と和魂の船  
鎮を定め後財出を威服せし先也玉歩也と由  
神兵を親帥あ玉の上乃如し是よ皇後と云と由亦  
斯制子違人玉無玉一玉 雄略天皇乃尚宇平群臣真  
鳥を大長とあ玉大伴連室屋物部連目を大連と為れ  
大玉一玉皇志玉親帥玉軍小伴部物部乃二部を分

た也々皇伴部ハ靴部あ玉弓部物部ハ兵部あ玉刀劍  
部と知玉斯玉 文武天皇乃大寶年小令を頒大也一  
時左右兵衛府ハ兵衛八百人左右衛士府左右衛門府  
子衛士二千人を配志玉都合八千人子及玉 兵士千人  
帳二人を置玉軍防令不見也然玉衛士府衛門府ハ  
大志二人少志二人を置玉志と直帳と職掌同一故子  
人以上と知玉是宮衛乃直兵也玉設令征伐の事  
あ也及臨時ハ大將軍を任玉其兵ハ國々乃軍團ハ徵  
る但一萬人以上ハ將軍一人副將軍二人軍監二人軍  
曹二人録事二人を補玉一萬人了大將軍一人と定ら  
る然ハ此時ハ三軍乃制と志玉後大皇蓋親帥の直兵  
ハ宮掖乃禁衛ハ供給と玉乃志玉一玉征伐了後玉



かゝ朝家乃軍禮一變せし処なり且大將軍を擧る  
子其門望を簡擇ひて乃譜第を輪轉せ蓋日本武尊の  
征夷乃任を膺らばしよ且以降道長命豊日命健日命  
武持連室屋連談連金村連と累代相承志く軍務を執  
仍一坂上犬養新田丸田村丸父子三世武勇を以て著  
と色一類是なり然らず弘仁天長よ且後貞觀不至く  
時ハ又代年ハ口紀ノ餘テ文實暗ニ遷リ沿革をのり  
から至是成親故實存るをく弛廢せんと以貞觀格及  
以貞觀臨時格乃選あ致所以也且以際近院右府能有  
衛府少帥としく參議せらば桃園親王乃子孫に兵  
權を握せむと日本武尊の胤嗣世々大連たり故

實ハ後と色ハ分ららん然共遂に兵權桃園親王の孫  
支子歸し萬世一統乃洪基あり了那昭せしを騰仰  
せし

是歲十月初旬幸隆の間謀越後國より且歸り景虎既に  
義清も同心志くお陣乃用意專を分申を語しか共幸隆  
ハ雲水乃禪僧と碁を圍居けがらず手段乃工事ハ餘念由  
かく打入更ハ東西乃應答せし序ありとや思ひらん  
間謀ハ傍ハ退入ハ良ありと碁を圍終りけが時近侍者  
云々と再報告を聞け何と云越後乃景虎村よみ  
同ハ志く打お家とハ景虎乃軍配大とハ鬼神ありと由  
何程乃とハあふへき次第ハ於てハ我等ハ一手を以て

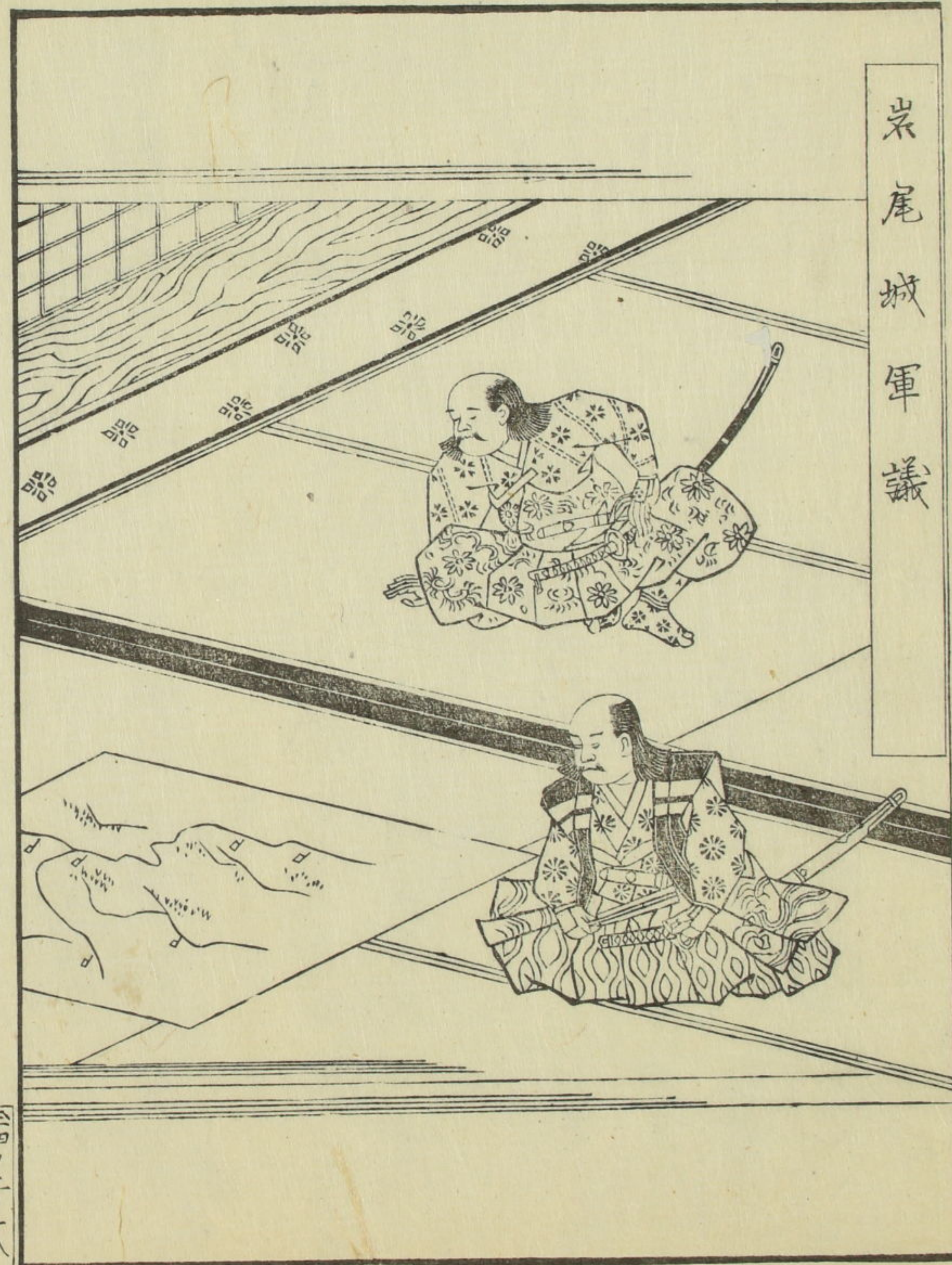
有無乃一戦を遂へし如く是面々其用意あるへしと觸流  
志けは海野乃一類我ゆくと打立岩尾乃城へ馳集  
る幸隆者到を披見しと乃ち一類乃老公小向く申さ  
りかば催促了後速に馳参ら新く乃条偏祖先乃再  
誕し玉ふとあ我覺えは也折當家乃太祖滋野親王小  
縣郡小下向在けふよ里以降歳ハ六百小又十餘年を  
え代ハ廿九を餘をまゝ本郡乃地直とく相傳更小  
違論かか里し村上義清が為小某又幸義を討也所領  
を掠奪せり也他國へ浪人し若干乃年月を送る良田  
晴信朝臣乃旗統小屬之衛本國へ歸る小一城乃直  
小子為る小然ハ方々の其の流浪志く小一時小

一飯乃芳思也如く他小御覽し一門同姓乃好不忘果  
勢也小小やと存小如斯と駭し打探せむ小  
乃幸隆を援玉とんと乃素意小のあゝ一甲列方の  
勝軍を急ぎを面々乃胸裏小思ふらせ玉へ小故と知  
也く小如斯くハ今度乃合戦ハ於味方打勝小と  
掌上小親とく小但景虎ハ剛強乃勇將乃然ハ若氣小  
を急ぎ過た小氣象也ハ信列小入意小ハ小民屋  
を放火し御村を亂妨し合戦を挑む也其時面々乃居  
所小引籠里運を兩端小窺ふ小乃と見せ玉也然ハ  
景虎段々小備を立かから猶小勇氣を示さんと甲列方  
持城た小小諸近くまゝ小押来小と必定形らん何小

あく海野平まゝく偽引出一たび味方の案内知らず境域  
なる是越後勢を迫くへ追攻く快く一戦を遂んず勝軍せ  
むと疑おく覺え以併去也ハ幸隆が短慮乃愚案ふく以  
面々乃異見も聞まわしく以と云ハ何由真田殿乃討策  
み後入愈きあく以と色代しく各々乃居城へ一先引込  
ま然く後ハ幸隆使者を甲府へ馳く景虎軍勢催促乃扱  
を告かハ海野平乃繪圖を注を一大里々也ハ晴信朝臣  
ハ本晴幸をよびハ小幡虎盛原虎留等ハ去色を示し猶由  
合戦乃評定を詢せけふろ三人と由同しく答中やう  
景虎義氣あく軍子も危ら走以とハ流石宿老乃侍大将  
も又又七人ハ愈々也ハ自國乃境を越くもあくと小縣

五十四ノ十七

乃郡まゝ手長ハ出張を急ぐんや也ハ又真田が注進乃  
如く海野平まゝく討たたらんハ合戦ハ持く持以と中  
愈く以且當月九日ハ春日ハを發足し以と十四五日  
乃頃をらるるハ海野まゝく冬暮ハかたうらんろ其日積よ  
里早く以と更ハ合戦あるへくハと中ハ此一節海  
野平合戦  
詞を刪定以  
景虎乃居城ハ越後國頸城郡春日山を以是より高田  
荒井松修園乃ハ小田切関川野尻ハ至く十四里野尻  
を越後信濃の境と以野尻柏原也也ハ荒町を徑く善  
光寺ハ至ハ里半善光寺より丹波島屋代戸倉坂本  
上田海野ハ頓る十二里許なり總く卅二里半餘と以



景虎又數六千餘と云六千人乃小荷駄馬乃大數を算  
る外軍防令外兵士十又了六駄馬と云ハ六千人外  
二千六百駄馬を充る形なり然ハ甲越乃人數積外  
又十騎一備士大将一人歩若黨卅人小者中間合又十  
人をも備くハ十一人外駄馬又足駄吏廿人形りと云ハ  
依ハ六千人外九駄馬之百七十足駄吏千四百八十人  
と知る都令人數七千四百八十餘又上馬七百九十足  
駄馬之百七十足外備くハ此人馬乃道を引外知と  
急くと云一日又里餘外過べくハ積里ハ形里  
因云天正十八年豊後關白秀吉公乃小田原を責ら也  
け外時其勢廿万餘騎二月朔日京都を首途ありて十

日之列吉田不到外代行行程五十二里餘廿餘町外一  
日外又里餘乃積と云ら外

晴信朝長十二日申刻外甲府を首途ありて岩尾  
城へ告東里一ハは幸隆云く十月申刻外ハ外方を以て  
弧とハ西方を慮と以甲府より葦崎ハ西方外南也里  
弧を背外ハ虚を討と云ハ一丈百丈外敵を云里必  
定十二日外葦崎外宿ハ云ハ十二日海日海後あり里  
外陣せり也十日日細高野外ハ押外入外然らんハ  
十又日當城外馬を入外ハ外有ハハ外意を以  
外き形里ハ掃除以下乃警衛念を入路次外外向ハ  
待外ハ晴信朝長外ハハ外幸晴業外小幡虎盛外景虎

か、早を召具しく、岩尾乃城へ入玉へば、幸隆か孫く、經  
營置を早けり。徳屋へ請ふ。種々不響應し。然後、小景虎か  
軍配を談し。細子細小海野乃地理を評定あり。味方乃手  
分を商儀らせけり。晴信朝長幸隆を旗本の先備不組  
合九子、矢澤等乃一族をば旗本と一手不置座すと定ら  
せけり。是は幸隆山本小幡原乃三人不向く中居り。村上  
義清ハ某か父乃仇形り。海野ハ某ハ舊領形也。今度の軍  
全ク其一身乃大事と思出ん。こゝへは、頼ふ他乃勢を  
加えらば、其一族をり。御先手を賜て早以へと、可  
望もあし。不餘義あく、聞えけり。不晴信朝長ハ三人乃老  
將也。是を許せ。以十六日乃戌刻、不晴信朝長、小諸、不

入玉へば、景虎乃先陣、小坂本乃南、不馳付く。甲斐、西陣乃  
間ハ里餘を隔たり。爰、不景虎乃先陣、長尾正景、晴信朝長  
乃小諸、着陣あり。早以へて、傳へ、聞急し。海野へ、駈向  
ひ、甲斐勢のいさぐ、打寄さ。不以多し。備を立んと。あせ家  
と云と。地理、不案内あり。進退、合期、世以、鬼角、まる也  
不、小山田備中守乃手乃者、松津、矢澤乃路を、一塞い、が  
大旗、不旗、其乃數を、し、ら、以、段々、不備を、た、く、押寄、ま、り  
不、曲川、不、流、く、抱澤、鴻乃旗を、差、く、最先、不、進、む、は、郡内、乃  
不、小山田、左、兵衛、尉、あり、し、其の、跡、く、ハ、長、隆、左、衛、門、尉、不  
曾、甚、ハ、塩、尻、永、田、福、澤、内、村、等、依、り、先、方、乃、衆、一、勢、を、不、引  
ひ、く、櫻、井、加、治、乃、病、を、不、栗、原、左、衛、門、佐、昌、晴、乃、勢、を

先と一々須田室賀綿内井上など云伝引乃兵士也の教  
うち續きたる景虎乃先陣意をとり且猛くを居ると云  
と中路次乃障おわくく十八日乃晚方小上田乃東か  
新岩下瀬原了着陣し大篝いく處と相く燒せま色ハ燐  
煙天を焦し一駁し幸隆あ色を見えまや思ひかよ  
景虎あ色ましく打こわくハ猪武者乃死生不承の振舞  
く其計あう安るしけ里但某ハ旗卒の先手相く景虎旗  
本を以て寄合せら色相及一番小打合く勝負を争ふ色  
々色ハ兼くそ乃用意まべくく女糧あくく先馬く秣  
かふく其報たる聖也は十九日乃早天了甲越乃軍勢二  
万二千餘ハ海野乃原小打臨んく陣をまふおくハ霜餘

乃曉景とのひ爰を淺間乃山陰を色ハ朝霧ありくく  
互ふかく計り近々と寄たふを知りま々里甲列勢ハ本  
陣乃後より弓手乃方ハ雁列ノ備を立色ハ原加賀吉昌  
後九十餘騎を引多く跡備を我かた先たる是乃幸隆か  
終く景虎龍の丸備ふ人數を記里自身旗本あく甲列の  
旗本小打合へく議したるけふ王を同あし内々山本晴  
幸小告教せたるは其説かく其組合せし船里良  
時うの里替乃日ハ既ふ午の刻余所乃ありく霧晴て  
絶あく小西陣乃旗の色々吹あひく尾花かく也ハ物具  
乃亮て里替小野邊乃霧かせよ里先よま川落ん景色を  
景虎もや化と里敵の備乃立やう尋常からん味方の内

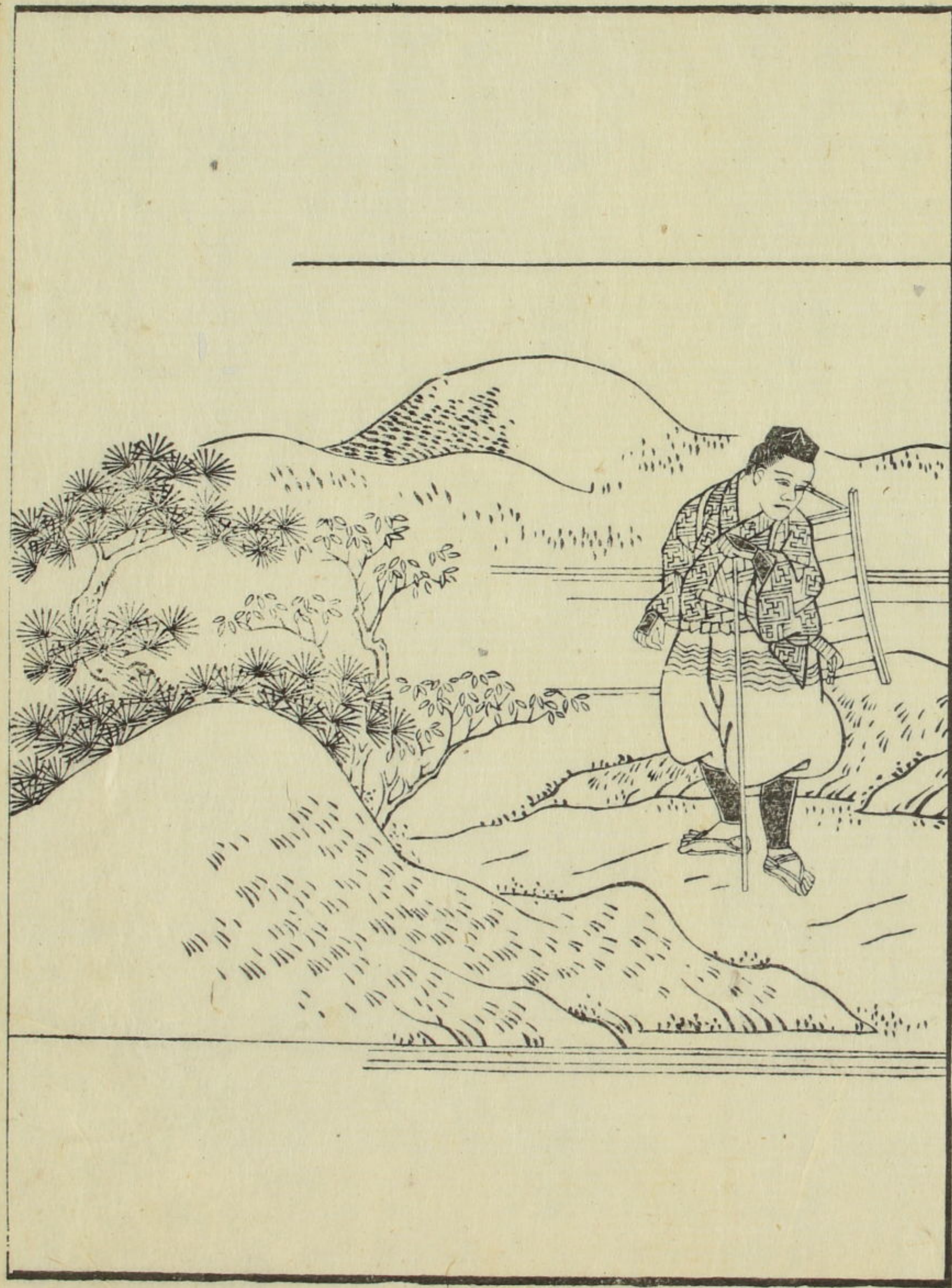
小野心乃中乃ありて甲列方へ内通せしとおふたは  
謀中かく時を其の軍利ありて然と中斯對陣一戦  
中及より引返さん中本意からり村上義清の思さん  
意をひりし且を晴信とちりめり乃矢形り意せよや  
兵士と中と諸平へ衆廻し下知をかせは長尾正景  
中と云まくり鉄砲を打掛廻り下より長柄の鐘乃  
をせりへ小山田備中守乃手へ突掛り一駒中せ以  
入小山田が手不相本望月も先より幸隆が計畧を能  
知たりと色は爰を先途と防さし程不中景夫ち中  
打中け二町むかひと引そり次り直江山城守の養  
父持崎和泉守安田上総介軍ハ斯出せれと叫り指

小山田左兵衛尉乃備へ面中ふら以切し掛る小山田  
まけり引退けし栗原左兵衛尉益々急乃大鼓を撃く横  
合より越後乃甘糟辺に中り備し馳向ふ如斯とあり  
景虎乃旗本不揚螺を吹さし清けか敷武去二騎栗原を  
さけり馳廻り子短く諸勢を引上たり乃ち不能り同  
せば景虎と守佐及後河守良勝形りとかや晴幸あを  
見く敵乃強らく引立ふ不長進を履きよあらり小山田  
栗原乃勢を制止せ玉ふ履きよや以と中以子よ里百  
足乃指物乃危十二人ちり散り下知を傳へりハ忽  
追止まり付幕より午刻より未乃半中乃合戦越  
後の勢を打取し二百六十人甲列方不り百三十一人



其日申刻小幡関を執りあつて晴信朝臣  
小室の馬を八玉人爰小幸隆乃今景虎乃旗本へ斬掛  
里村上義清を撃つ多年の鬱懐を吐らさんと思ひし  
景虎もさか勇將たむを甲列方乃備立を見く軍を大車  
小あひかひ輕くしきもくらしきをせし暴人敷を引上  
志の小幸隆のしと小實の山あひ入る子をむあしく歸る心  
地しくよあ小残念し思ひ何あ小志く村上を打ちやと  
く平乃者十口八人を引率し坂本乃道を追掛しかど小  
越後勢も疾うち過ぐらど遠くをた望志か小殿乃  
作法嚴重おどばたをさく方便なくけおを以く幸隆  
たかこ成りし引還し又お計策をめぐらさめとく

小室乃城を執りし今景虎と志くあつて乃今我小幡  
利を得あひしてとく晴信朝臣軍令乃正しく士卒を  
よく鑠鍊せらばし故形お中を賀し中志あは晴信朝臣  
ハ却く幸隆が子細く越後乃軍略を海をせしあつて  
味方乃備組不便よく一戦お勁敵を打破しを得し形也  
は真回の勲功お莫大お也猶お上油めなく方便を  
施しゆへと褒賞他小殊なましあし小幸隆をさか免海  
野乃一類末々お喜び乃眉を開き勇氣凜々としく  
後乃合戦お終しは更お他乃加勢し及し景虎を我打  
捕る勲賞おほあらんと聞きあつて身々乃各限小用意  
をねを我失乃とく是よ里乃ち埴科更級兩郡とく



平均し人質を遺棄無二乃甲列方と形見は是は同日  
廿八日子晴信朝臣甲府へ馬を込玉へは幸隆も岩尾不  
還る様しく小山田・飯富乃西将不暇乞し其夜以我り子  
姿を伏し愛下景虎乃陣拂せし跡を乞と久遠々と越後  
乃國より赴き関山松崎なと云処に至り猶新々春日  
山乃路を向しと一人乃老嫗が熟と幸隆を打見云  
る。昨日乃暮りく御房乃如く春日山へ乃路を問入  
乃有りか。此先乃小溝あり斬たは知れなくは元來一  
か失へ還ら玉へ様なく命失ひし何れせん云幸隆出  
也を剛某の春日山乃毘沙門天主へ糸指おけり叶もぬ  
と乃有り旅立ちも乃也如何せば乃おべりやと歎けり

云の又一人乃壯士おまは和僧を甲列方乃同牒おらん  
命二のありや。一實子春日山へ乃んとならは毘沙門  
天へ備ふ座を信施物有へ。其色出くかへと云幸隆か  
絲く用意せし金銀乃封ふたふを出し見せ也。壯士  
初々真乃山伏形見と思へ傍探り。然も某案内をへ  
と云先も立也く頼る春日山子至り毘沙門天を礼し  
封金銀を教傳し下向る及彼壯士云らく遠方より系  
諸か。多ひのあり。此城乃扱を見物あるか。系もさふ  
ま。乃の細かくいと云子。是跡を續きて也く實也  
門乃番士見然むおし。曲輪を殘り見物し  
お。元乃路し出く。時不幸隆云く思乃傳子毘沙門

天小諺で川今おり入して形一次羽黒ひ了年終せん  
と思へハ出也よ里折勝鉦誇お至らましくおみ形里復く  
お其のかたへ等句しく玉も色と請を圖く彼壯士左乃  
之化玉み形よ越後了市音人たか里おあきも水を能後  
了瘰果をひくし玉へと云くましく見返る市世以異路を  
さしく走る幸隆市心中お大おおどろそ思と危く立去  
く急くおどお野尻乃里をおお形せんとせ一時人數の  
多すもあしく以鐘長刀乃鞘をさけし追其もり幸隆今  
も遁也がたし然と市死も易く一級夜市かくもしく見たり  
と思ひ忽お伏乃裝束を脱く畦間お立お葉山子お打着  
石を鎮壓と形しく治お去けお自身ハ裝笠をしく閑々と

小款うた入る立去ぬ追子乃兵士あく了某里治乃中お  
人臨た里と思ひ立留る能く見也は公伏形もさしく彼  
遁也かくを知ら入水志くけりあお哀也や死すも骸  
引揚お不及きしく追もあしくよ里引返以さしくお其  
幸隆からうしく命助り上信濃國了入王を得る里夕後  
日數ゆる岩尾乃城子何里何く之也は越後よ里某書あ  
里真回諺函教と上書しく至る誰と市名苗字外思ひ  
よら孫と披き見お不疇お公伏乃姿お似きく我も見物  
お市越ひひしかは我市お春よ山う何くお処んをて  
以他毘沙門乃賽物ハ還入系ら以おとて對登を乃  
ましく還一某れ里幸隆も一某よ里彼案内し以お壯士

を後然形なりと疑ひしかど由誰からんとも又おのひ  
寄せりしおしは景虎ありありけふもや人乃云不違  
そ人勇あま里ありし心も危く軽々しき性形も里は  
らばまて討策を不と出度方便ありと獨笑しと彼書状  
先元乃如く巻收り對し決け別れ一筆書そへく文袋不  
入罪ありし謀へき老を死所不仕三て名しや里潜不跡  
を去りし以持を野原乃里乃おそ形也不斬殺り楚指たり  
々不野原乃里人あをを見く危く春日ふははせし  
かば景虎おの文を取去り名不真田の家長より景虎  
家中某へ老り幸隆のち其國を去り岩尾不歸ひも以  
其方へ氣ひせん頃御届玉も里ひへと書たり景虎忽不

眼を瞋らし齒を切り太刀を握り立あり里近習乃列を  
見廻し何とか思ひなんの奥へ入り二日三日程を  
物控りしに體あく大息ついく居たりけふか書状を見  
ると翌七日不南りけふ日何事をり思ひ泊たりん微  
笑て手を拍あ形口お真田めり方便也より幸あふ形  
く由我手是不等しき故老の心中を疑ひしお我憂慙々  
也我号矢を去り其因如き不劣ふへしとは思ふ縁と口  
智謀ハ七日乃後也あり真田り生るあらん不どは我依  
別を打取正た為とからし如何ふゆし幸隆を亡不所  
を急と胸中不工事を察したりと形り然也と由幸隆り  
一時乃及間外中らむく越後の君長を不疑不端を引

出しと相里此一節信列芦田驛程越後雪降積里  
長其乃家記小  
 人馬乃通容易から孫を景虎も蜻龍乃玉淵子蜻  
 家ねのひを相しく春日山乃雪室小引出色をば信濃  
 乃関の戸さしく商客乃往東さへむりりく成也く佐  
 小自然と越後押乃者小淵小せ一西科の諸士長後孫小  
 堪り孫く打雲々おり入とち催ひき雪中小雜子を追  
 捕狩をと遊人を見く幸隆雪の上を走み便よき葉  
 昏を案し出し是を履く雜子を追小果く獲物食か里  
 志のば皆人あせるおひ遂ふ常ふ小履もあし教出と  
 と相り深雪乃山路とゆ云以て廻るに白史を得しか  
 ハ幸隆ひとり黙笑くかくく又用人處をあらべし

不思議をりける雜子追の相と形節のひをりけりと  
此一節信列松本の兎角を教うちる年暮く天文の十  
 七年の相り相里幸隆出とし是を相り討し後十一年  
 不當里中幹の一回せし相猶及が能を報を少子出とを  
數を去ちて越後へ往來し村上義清を規が入と云共  
 景虎を辱く以て意を悟りよく村上を保護せし知と年真  
 田さら相間を得以然共景虎は月下自信列へ發向の  
 陣觸あり諸士とりし小用意をあらしめを聞き傳し内  
 小室へ告夫相一かは飯田兵部少補虎高早馬を甲府  
 へ立て是を復を以晴信朝長を諷訪伊奈西郡延累乃為  
 小文月七日甲府を首述中りく留守の程ありと色は

甲府より諏訪へ飛脚にて至る真田が住進状を奉る晴信  
朝長状を見終り景虎二度お殺せぬと偏る去年忠を遂  
ざら故乃てうあらうけり小縣兩科の諸士乃内小幸隆  
か譚ふより伴々長尾へ申通ひお老乃出来しを景虎中  
よりおりのひく遠々と打おると先々く見然は例乃遠雄  
乃勇氣と知也大進は後々とありらうく遠慮させおは  
自他と氣死く遂ふを勝利をひくを鏡おかけ見ら  
如く但しあより真田が心中の景虎と有妻乃合戦を  
挑まんと思儲ひおとぬるお晴信出馬延引せば真田と  
合戦及ふぬし真田元氣村上を不戴矢乃概とおせば  
其肉を喰ひ其皮を寝處せんとおあらめ子お一川も誤

く真田軍を仕損じおは晴信の鋒乃弱なり急や者共と  
云おくく誡訪より直了打立く和回峠を馳越長之保を  
東へ押内山乃城へ入るあう後陣の兵士を待ひけん  
と志ばうく人馬乃息のせ兵糧秣の支度し小縣兩科  
乃諸士へ謀し合せふ々奉る小倉園乃飛火を定め景虎  
の出勢を今やと待せらぬ幸隆の岩尾乃城乃掃除す  
寧ふ沙汰し晴信朝長乃本陣内へ出仕し景虎今年乃  
寺尾官崎より地尾峠を越く戸石乃邊へ打おるのと  
おがえひお乃筋々へむけく御計畧ひもぐやと中しお  
よし晴信朝長さらば戸石お向く子配せんお岩尾へ  
やがく本陣を後さうし其上あう又數くおを儀せ

り致ぐーとく幸隆を返されたり幸隆岩尾了還り  
 十二歳おか多長子小右郎を使とく戸石よ野小  
 室あつと乃地圖を晴信朝臣乃中一人内山乃城へ進  
 せたりし小晴後嗣後面會あつと乃密儀骨法さ次が  
 尋常おらび見えれば大お賞美せり色をうぐ元服乃  
 儀式をとく乃へら成田重代乃徳乃字を興く真田源  
 太右衛門尉信綱と名乗せり色紺糸乃鏡の裁料お新調  
 ありし小美濃関鍛冶乃鍛太お太刀一腰粟毛乃馬一疋  
 を引色たりしおは幸隆史婦をうぐ元郎等とら小を  
 まく晴信朝臣乃士を重んじ禮節をひくくあみを感  
 歎しと死力を致さんとおもえぬも乃おぬらとけり





